

中学校 教育相談

中学校における保護者と教師の信頼関係構築に関する研究

教育相談課 研究員 橘 美那子

要 旨

中学校において、学校からの保護者の自発行動を促進するような情報提供により、保護者と教師の間で、双方の信頼関係が深まるかどうかを検証した。その結果、信頼を測る2因子（学校への期待感と協力的態度）の数値の変容に全校の保護者では有意な差は見られなかったが、行動した保護者とそうでない保護者との間には有意な差が見られた。また、学校への期待感と情報が役立ったと捉えている度合いに正の相関関係が見られた。

キーワード：中学校 信頼関係 保護者 学校からの情報提供 働きかけ

I 主題設定の理由

文部科学省「生徒指導提要」（2010）によると、「児童生徒理解は、一人一人の児童生徒を客観的かつ総合的に認識することが第一歩であり、日ごろから一人一人の言葉に耳を傾け、その気持ちを敏感に感じ取るという姿勢が重要」であり、「生活環境の急激な変化を受けている中学生・高校生の不安や悩みにも目を向け、児童生徒の内面に対する共感的理解を持って生徒理解を深めることが大切」とある。学校には様々な心身の悩みや問題を抱えた児童生徒がおり、なかには、家庭や家族に関することを相談してくる児童生徒も存在する。家庭や家族のことを含めた児童生徒の悩みに対応するには、学校側の取組だけでなく、家庭の協力も欠かせない。

ところが、保護者と教師の関係について上村（2015）は「両者は子どもを援助するチームのメンバーではあるものの、同じ場面で子どもを援助し、その経験を共有することはほとんどないと言っても過言ではない。学校、家庭でそれぞれ子どもを援助している教師と保護者とは、互いの経験や知識が大きく異なる場合も少なくない」と述べ、米澤・尾崎（2012）は「考え方や姿勢の相違は、些細な言動や言葉のとらえ方の違いなどによりトラブルの発生のもとにもなりかねない」と述べている。

家庭と学校は協力していかなければならないが、米澤・尾崎（2012）による調査結果では、「教師も保護者も子どもを育てていく上で両者の信頼関係は必要であるという意識は一致していたが、信頼関係構築のための方法面では考え方にズレがあることが判明した。保護者は教師との直接的な関わりや相互の努力を通して信頼関係の構築を心がけているが、教師は子どもとの信頼関係の構築を重視していた」と述べている。

また、今井（2011）が「教師との信頼関係を築くことに無関心な保護者や、教師に期待はしているものの協力的でない（協力の仕方がわからない）保護者の割合が高いことから、保護者に対する働きかけが必要である」と指摘しているように、信頼関係構築には学校側からの働きかけが重要であると考えられる。

保護者と教師の信頼関係を構築するための働きかけを行った先行研究では、保護者が願う子供の姿を目指したソーシャルスキルトレーニングの実践や、保護者対応に関する校内研修が取り上げられている。

本研究では、学校の考えが保護者に伝わることで保護者自身も行動を起こしやすくなるのではないかとという点から、「信頼関係構築への成功プロセスモデル」（米澤・尾崎，2012）の中にある取組の一つ、「学校からの情報提供」を働きかけとして取り上げ、学校からの働きかけが保護者と教師の信頼関係構築に有効であるかを検証するため、本主題を設定した。

II 研究目的

学校からの保護者の自発行動を促進するような情報提供により、保護者と教師の間で、双方の信頼への意識が深まるかどうかを明らかにする。

### Ⅲ 研究の実際とその考察

#### 1 保護者と教師の間の双方の信頼への意識について

露口（2013）は、保護者と学校の信頼について「共通の目標に向けて、互いに期待感を持つとともに、協力的態度で接する関係を示す」と述べている。これを基に、本研究における双方の信頼への意識は、保護者側は「保護者が、教師に対して期待感と協力的態度を有している状態」とし、教師側は「『保護者は教師を信頼している』と教師自身が感じている状態」とする。

また、露口（2013）は「組織を対象とする信頼研究では、全体と部門で相手からの信頼の程度が異なるという現象が生じる」としながらも、担任個人に対する信頼と学校組織全体に対する信頼は「完全に離散しているのではなく、相関関係にある」と述べていることから、本研究では、保護者からの信頼が担任個人と学校全体のどちらに向けられているかは考慮しないものとする。

#### 2 信頼関係構築への成功プロセスモデルについて

米澤・尾崎（2012）は、保護者調査、教師調査（質問紙と面接）の結果を分析・検討し、信頼関係構築に有効なプロセスモデルとして、〔パートナーとしての契約〕〔指導方針の決定〕〔日常会話での情報収集〕〔相互のねぎらい・評価〕〔問題に対する相談〕〔問題の共有〕の6要因がサイクルを成す展開を想定した（図1）。このモデルの特徴は、どの行動要因からでもスタートでき、①時系列の順番に進めなくてもよいこと、②全ての要因がそろってなくてもよいこと、③どれか一つの要因を常に心がけている行動でもよいこと、の3点である。

なお、6要因については次のようになっている。

〔パートナーとしての契約〕

信頼関係がまだ構築できていない状態でも、とりあえず一緒に問題に取り組もうというパートナー関係となり、協働して子供の支援にあたる働きかけ。

〔指導方針の決定〕

教師主導で方針を決めて保護者に伝えることにより問題に対する対応を明確にする対処行動。教師が保護者の考えや思いを聞きいれながら進めることが大前提だが、学校からの情報提供が主な場面となる。

〔日常会話での情報収集〕

直接顔を合わせて話すことにより、コンタクトが多くなる利点がある。気軽な挨拶や立ち話など普段からのコミュニケーションを大事にする。

〔相互のねぎらい・評価〕

保護者の子育ての不安の解消や自信を持ってもらうために保護者をねぎらう言葉をかける行為など。保護者からもねぎらわれ評価されると、より良い関係に向かえる。

〔問題に対する相談〕

保護者の心労や不安をくみ取るべく会う機会を増やし、不安解消を重視して相談をうける活動。

〔問題の共有〕

保護者からの相談をうけ、悩みを共有することや保護者の思いを知ることが、一緒にがんばろうという姿勢や意識がうまれるきっかけとなることを示す。

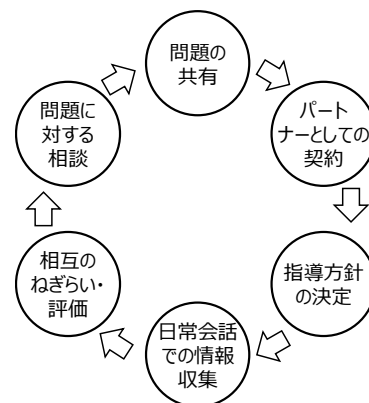


図1 信頼関係構築への成功プロセスモデル

#### 3 学校からの情報提供について

##### (1) 研究協力校が行う情報提供

ア 校長室通信…学校で取り組んでいることなどを伝え、協力を促す。

イ 学校だより…学校の様子を伝える。

ウ ほけんだより…生徒の健康に関する情報を伝える。

エ 学年通信…各学年の様子を伝える。

オ 学級通信…各学級の様子を伝える。

カ メール配信…週に1回の頻度で配信。

大事なことの確認やスピーディーさを求められる内容の連絡を行う。

##### (2) 本研究で加えた情報提供

研究協力校が行う情報提供に加え、保護者向けパンフレットを作成して家庭へ配付した。内容として、子供が勉強をしているとき、落ち込んでいるとき、自分の長所を見付けられないときなどに子供にかける言葉の例を載せた。このパンフレットを基に子供と接してみようと思って保護者が行動することを目指した。

#### 4 検証方法について

##### (1) スクールコミットメント尺度

スクールコミットメント尺度（表1）は、露口（2013）によって作成された保護者の学校に対する信頼を測定する尺度であり、「期待性」「協力性」の2因子17項目からなっている。学校に対する期待感に関する8項目、協力に関する9項目それぞれに対して、“全くあてはまらない”から“非常にあてはまる”の4件法で回答を求めた。

表1 スクールコミットメント尺度

1	学校の先生に親しみを感じる。
2	学校の行事等には、積極的に参加している。
3	P T A活動に、積極的に参加している。
4	子どもが通っている学校に愛着を感じる。
5	学校の先生は保護者の意見に耳を傾けている。
6	子どもの学力向上に関して、学校に期待している。
7	子どもの心の教育や体力健康づくりについて、学校に期待している。
8	P T Aの委員や役員をやりたい。
9	もっといろいろな行事活動で、保護者に協力を依頼して欲しい。
10	自分の特技が役立つのであれば授業にも協力したい。
11	運動会や文化祭など、学校行事にはできるだけ参加したい。
12	P T A活動にはできるだけ参加したい。
13	悩みや心配事があるときは、学校の先生に相談している。
14	悩みや心配事を、学校先生と共有できている。
15	学校の先生は、悩みや心配事を理解してくれている。
16	学校から依頼があれば、ボランティアとして協力したい。
17	学校からの通信等には、じっくりと目を通してしている。

##### (2) 学校からの情報提供に関する調査

保護者が学校理解のために活用している情報（経路）を明らかにするための調査として、学校からの情報提供の種類ごとに、学校理解や子供理解に役立っているかどうかの視点で保護者に回答を求めた。また、情報提供の内容や回数などに関する回答を求めたほか、学校での活動や学校からの働きかけがきっかけで子供の教育について自らの考えを振り返ったことや家庭で実践したことなどについての回答も求めた。

#### 5 研究の実際について

##### (1) 対象

研究協力校の保護者（2018年度1・2年保護者73名、2019年度1・2・3年保護者122名）、教師

##### (2) 実施期間

2019年3月～8月

##### (3) 校内研修について

保護者からの信頼を認識するためには教師側の受け取り方も重要であると考え、2019年5月から7月の期間に1回15分程度の時間で校内研修を実施した。校内研修では、教育相談に関する用語やスキルをテーマとして取り上げた。保護者や生徒と接する際に役立ててもらうだけでなく、これまでの学校からの情報提供の中にも盛り込まれていた内容を取り上げて、学校から保護者への一方的な情報提供ではなく、教師も一緒に学んでいるという姿勢で進めていくことを目指した。主な内容を以下に掲載する。

###### ア 第1回「考え方のクセ」

自分やまわりにとって健全かつ建設的で、現実に即した考えを養うために気をつけることについて。

###### イ 第2回「アンガーマネジメント」

感情の適切な対処の仕方について。

###### ウ 第3回「きく」

相手を受容するためのきき方について。

###### エ 第4回「リフレーミング」

同じ事実、同じ状況でも捉え方を変えて、その人らしさや魅力にすることについて。

###### オ 第5回「アサーション」

相手を思いやりながら自分の気持ちを伝える言い方について。

###### カ 第6回「レジリエンス」

逆境や困難に遭ったときに負けない強さと、思い悩み苦しんでもそこから回復する力について。

キ 第7回「コーチング①問いかけ」

成長に必要な事柄を気付かせ、自己啓発し、成長を促す問いかけについて。

ク 第8回「コーチング②ほめ方」

相手を承認するほめ方について。

ケ 第9回「コーチング③勇気づけ」

困難を克服する活力を与えるために気を付けることについて。

6 結果と考察

学校からの情報提供のうち、校長室通信，学校だより，ほけんだより，学年通信，学級通信，メール配信を「文章による情報提供」，三者面談，二者面談，授業参観，行事の様子，子供との対話，担任との対話を「直接的な情報提供」とする。また，事前事後調査で項目数の違いによる数値への影響を考慮して，情報の役立ち度から保護者向けパンフレットの回答は除いた。

(1) 学校からの働きかけをきっかけに行動した保護者と特に振り返らなかった保護者の比較

スクールコミットメント尺度の期待性と協力性，情報の役立ち度の平均値を比較したところ，行動した保護者のほうが平均値が高かった（図2）。

Mann-WhitneyのU検定で平均値を比較した結果，事前調査の期待性，事前調査の協力性，事後調査の協力性に有意な差が見られたが，情報の役立ち度については，有意な差は見られなかった（表2）。

スクールコミットメント尺度と学校からの情報提供に関する調査の関連性をみるためにSpearmanの順位相関係数を算出したところ，事後調査で，行動した保護者の期待性と協力性の合計と情報の役立ち度に5%水準で有意な正の相関が認められた（相関係数0.489）。

これらのことから，学校からの働きかけをきっかけに行動した保護者は，その働きかけを保護者自身が有効だと感じ，期待性と協力性が高まった可能性が考えられる。振り返らなかった保護者に対しては，学校側からどのようなアプローチを行っていけばよいかを検討する必要がある。

(2) 保護者集団別の比較

スクールコミットメント尺度の2因子それぞれの平均値を基に，保護者を図3のようにA，B，C，Dの四つの群に分け，学校からの情報が役立ったかどうかの平均値を比較したところ，表3のようになった。2，3年生の事後調査では，情報の役立ち度が大きいのはA群であり，低いのはD群であった。全校の事後調査では，情報の役立ち度が大きいのはA群であり，低いのはC群であった。

スクールコミットメント尺度と学校からの情報提供に関する調査の関連性をみるためにSpearmanの順位相関係数を算出したところ，事後調査で，A群の期待性と協力性の合計と情報の役立ち度に5%水準で有意な正の相関が認められ

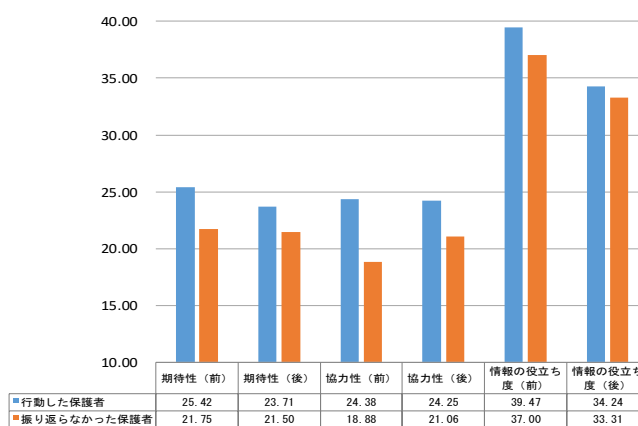


図2 行動した保護者と振り返らなかった保護者の平均

表2 スクールコミットメント尺度のMann-WhitneyのU検定

下位尺度	U 値	Z 値	P 値
期待性 (事前)	31.50	-2.826	.003 **
協力性 (事前)	40.50	-2.426	.013 *
期待性 (事後)	132.50	-1.650	.101 n.s.
協力性 (事後)	117.50	-2.064	.039 *

\*\* p<.01 \* p<.05

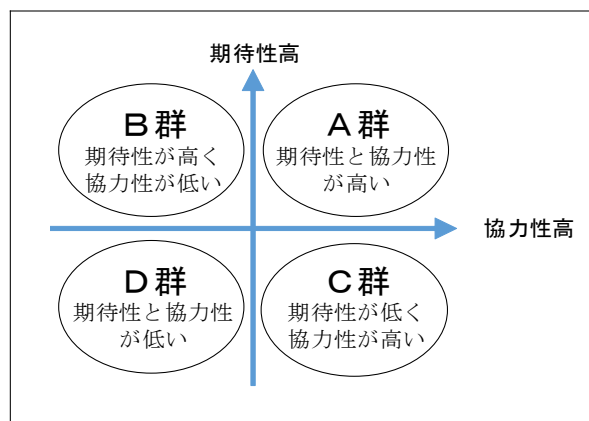


図3 保護者の分類

た（相関係数0.402）。

さらに、Kruskal-WallisのH検定で、文章による情報提供の合計点、直接的な情報提供の合計点、全項目の合計点の平均値を比較したところ、事後調査の直接的な情報提供に有意な差が見られた（ $H=9.343$ ,  $p=0.025$ ）。

これらのことは、学校への期待性と協力性が高い保護者は情報が役立っていると捉えている程度が大きいという傾向を表しており、また、保護者からの学校への期待性と協力性は、直接的な情報提供と関係があることが考えられる。

表3-1 群ごとの情報の役立ち度（事前）

項目 学年群	文章による情報提供				直接的な情報提供				情報提供の合計			
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
2年	18.08	19.00	<u>21.25</u>	15.94	18.43	<u>20.00</u>	<u>20.00</u>	18.89	36.46	39.00	<u>41.25</u>	34.38
3年	<u>19.79</u>	18.67	17.00	18.22	<u>20.36</u>	19.33	19.00	19.44	<u>40.14</u>	38.00	39.00	37.75
全校	18.96	18.78	<u>19.13</u>	17.08	19.39	19.56	<u>19.67</u>	19.17	38.37	38.33	<u>40.50</u>	36.06

表3-2 群ごとの情報の役立ち度（事後）

項目 学年群	文章による情報提供				直接的な情報提供				情報提供の合計			
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
1年	17.38	18.50	17.14	<u>18.73</u>	15.36	<u>16.30</u>	15.50	15.40	32.77	<u>34.80</u>	32.00	34.13
2年	<u>20.55</u>	18.00	18.60	16.86	<u>16.82</u>	15.75	15.00	13.88	<u>37.36</u>	33.75	31.50	30.43
3年	<u>19.23</u>	18.63	18.33	17.80	<u>16.82</u>	16.63	15.33	15.18	<u>35.46</u>	35.25	33.67	32.70
全校	<u>18.97</u>	18.42	17.87	18.03	<u>16.33</u>	16.27	15.38	14.97	<u>35.08</u>	34.69	32.33	32.88

\* 下線は、各項目の中で最も数値の高かった群の値を示している。

### (3) 全校の変容

スクールコミットメント尺度の2因子について平均値を比較したところ、期待性は変化がなく、協力性は22.90から22.63へ低下した（図4）。この結果をもとにWilcoxonの符号付順位検定で平均値を比較したが、有意な差は見られなかった。

スクールコミットメント尺度と学校からの情報提供に関する調査の関連性をみるために、Spearmanの順位相関係数を算出したところ、表4のような項目に相関が認められた。事前事後の調査ともに期待性と情報の役立ち度に正の相関が認められたことから、学校からの情報提供が保護者の期待性を高めている可能性が考えられる。また、事後調査で期待性と直接的な情報提供にも正の相関が認められたことから、1学期中に保護者自身が直接話を聞いたり見たりして得られた種々の情報が、保護者の期待性を高めている可能性も考えられる。さらに、文章による情報提供と直接的な情報提供には事前事後ともに正の相関が認められたことから、保護者は、文章と直接的それぞれの情報提供を同程度に好意的に受け取っていることも考えられる。

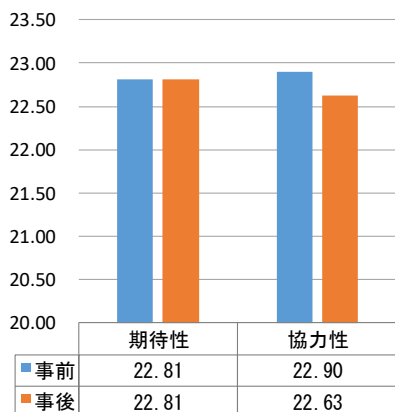


図4 全校の平均

表4 スクールコミットメント尺度と情報の役立ち度の相関

	相関が認められた項目	相関係数
事前	文章による情報提供と直接的な情報提供	.619 **
	期待性と情報の役立ち度	.236 *
事後	文章による情報提供と直接的な情報提供	.561 **
	期待性と情報の役立ち度	.261 **
	期待性と直接的な情報提供	.247 *

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

#### (4) 学年間の比較

スクールコミットメント尺度の2因子について平均値を比較したところ、学年が上がるにつれて数値が高くなる傾向がみられた(図5)。この結果をもとにWilcoxonの符号付順位検定で学年ごとの事前事後調査の平均値を比較したが、有意な差は見られなかった。また、Kruskal-WallisのH検定で学年間の平均値を比較したが、有意な差は見られなかった。学校からの情報提供に関する調査の結果を事前事後で比較すると、2年生と3年生ともに数値が低下した(図6)。

これらのことは、子供が中学校に入学してからの年月が長いほど学校のことがわかり、保護者がある程度の安心感を持っているのではないかということ、情報提供の種類によっては前年度と似たような内容があり、もうすでに知っていることとして捉えているために役立っていると感じている度合いが低いことも一因として考えられる。

#### (5) 保護者と教師の比較

教師は保護者からの信頼をどの程度認識しているかを測るため、スクールコミットメント尺度の質問項目を「保護者が学校をどのように思っていると思うか」というような表現に変え、参考値とした。

期待性の平均値は23.3から22.3、協力性の平均値は24.3から22.8と、ともに低下したが、Wilcoxonの符号付順位検定で平均値を比較したところ、有意な差は見られなかった。

また、スクールコミットメント尺度の質問項目別に事後調査の保護者と教師の平均値の比較をしたところ、図7のようになった。平均値が大きく異なっている保護者と教師の質問項目は表5のとおりである。質問項目からは、教師が考えている以上に、保護者は①教師に親しみを感じている、②教師は意見に耳を傾けてくれていて感じている、③教師は悩みや心配事を理解してくれていると感じていることが考えられる。しかし「保護者は相談してくれている」と教師が思うほどには「教師に相談している」という保護者の結果が出ておらず、これは、保護者の相

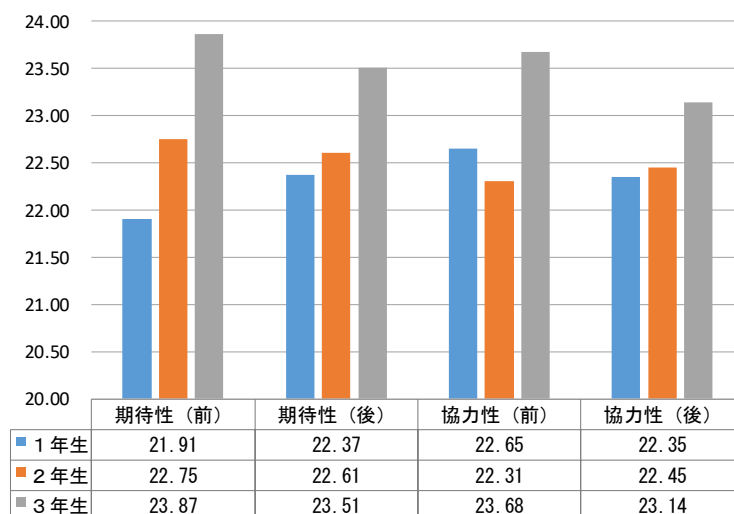


図5 学年ごとの平均 (スクールコミットメント尺度)

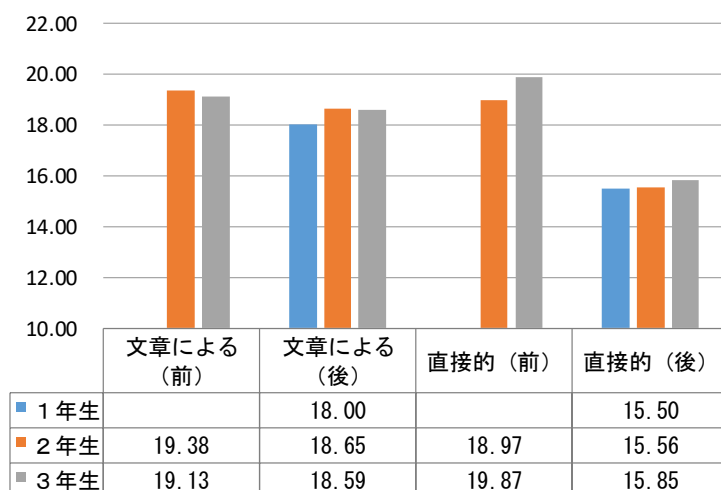


図6 学年ごとの平均 (情報の役立ち度)

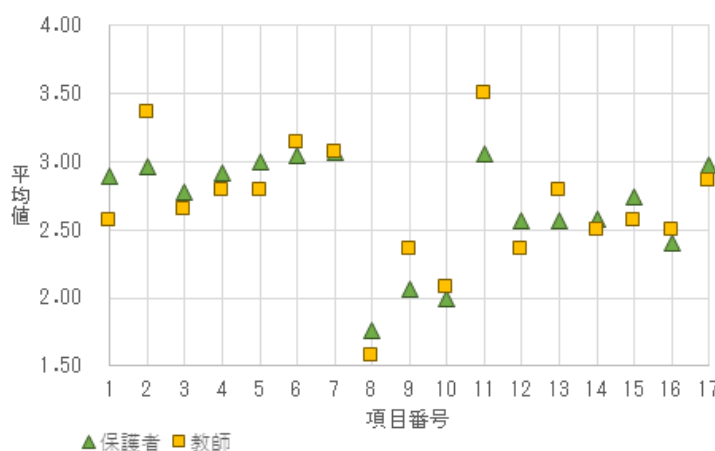


図7 保護者と教師の平均値の比較

談相手が教師ではない可能性と、教師には相談しにくい要因がある可能性とが考えられる。学校行事等の参加については、保護者の数値に対して教師の数値のほうが高く、「保護者はできるだけ参加してくれている」と教師が認識していることの表れではないかと考えられる。

表5 保護者と教師との認識が乖離した質問項目

保護者への質問	番号	教師への質問
学校の先生に親しみを感じる。	1	保護者は、学校の先生に親しみを感じていると思う。
学校の行事等には、積極的に参加している。	2	保護者は、学校の行事等には、積極的に参加していると思う。
学校の先生は保護者の意見に耳を傾けている。	5	保護者は、学校の先生は保護者の意見に耳を傾けていると思っている。
もっといろいろな行事活動で、保護者に協力を依頼して欲しい。	9	保護者は、もっといろいろな行事活動で、保護者に協力を依頼して欲しいと思っている。
運動会や文化祭など、学校行事にはできるだけ参加したい。	11	保護者は、運動会や文化祭など、学校行事にはできるだけ参加したいと思っている。
P T A 活動にはできるだけ参加したい。	12	保護者は、P T A 活動にはできるだけ参加したいと思っている。
悩みや心配事があるときは、学校の先生に相談している。	13	保護者は、悩みや心配事があるときは、学校の先生に相談していると思う。
学校の先生は、悩みや心配事を理解してくれている。	15	保護者は、学校の先生は、悩み事や心配事を理解してくれていると思っている。

記述による教師の意見の中には、表6のように保護者の変化を述べている内容が見られた。学校からの働きかけの影響を感じ取ったり、保護者と一緒にと意識が働いたりしていることが考えられる。

表6 保護者の変化を感じた場面やきっかけ

場面やきっかけ	教師の記述内容
三者面談 二者面談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・じっくりと情報交換をし、前よりも教育活動に積極的になったと思う。</li> <li>・将来的な職業や進路について考えながら進路決定を意識してもらっている。</li> <li>・子供のこれからの課題を共有したことで、学校でも家でも同じような声かけをしましよと決めることができた。</li> </ul>
面談や家庭訪問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人と面談を行うことで、学校あるいは教師との信頼関係を築くのに役立っている。</li> </ul>
校長室通信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て、子供への接し方などの参考になっている。</li> <li>・校長室通信が「役に立つ」「ためになる」という保護者の声を伝え聞く。</li> </ul>
個別の連絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気になった出来事等を直接保護者に伝えることで、学校と保護者と同じ方向で生徒に話ができたとと思う。</li> </ul>
面談や家庭訪問 個別の連絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接顔を合わせて話をしたり、電話でも伝言ではなく直接に本人と話ができると、話した内容が誤解されずに伝わっていると思う。</li> </ul>
全般	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭内での話題となり、コミュニケーションができた。</li> <li>・学校（教師）の考え方、方向性を伝えることができた。</li> </ul>

#### IV 研究のまとめ

本研究では、学校からの保護者の自発行動を促進するような情報提供により、保護者と教師の間で、双方の信頼への意識が深まるかどうかを検証した。その結果、信頼を測る2因子のうち協力性で数値が低下したが、有意な差は見られなかった。また、教師側の信頼への意識も数値が低下したものの、有意な差は見られなかった。

一方で、学校からの働きかけがきっかけで行動した保護者と、特に振り返らなかった保護者との比較では、事前事後の調査ともに、期待性と協力性の合計点に有意な差が見られた。また、行動した保護者は期待性と情報の役立ち度に相関が見られた。

これらのことから、保護者の自発行動を促進するような情報提供により保護者と教師双方の信頼への意識が深まるという結果には至らなかったが、保護者の自発行動を促進するような情報提供と、その情報の内容が保護者にとってどの程度役立っているか、さらには保護者からの期待感には因果関係があると考えられ、学校からの情報提供の重要性が示唆された。

## V 研究の課題

本研究では、学校からの情報提供に着目して保護者と教師双方の信頼への意識について調査したが、文章による情報提供が手元に届かないという意見や、情報量や数が多いという意見も保護者から寄せられた。また、同じ内容であっても保護者によっては役立っているかどうかの度合いが異なる結果となった。情報提供をする際、まずは家庭に届けるためにどうしたらよいか、次に情報提供の種類ごとの目的、内容、頻度などを吟味する必要がある。「通信の内容を先生方にも伝えてほしい」という保護者の意見もあり、学校から保護者への一方的な情報提供だけでは信頼を得られにくいと考えられるので、情報提供された内容を教師も理解し、実践していくことで、保護者からの信頼につなげていくことが求められるであろう。加えて、学校への期待感と協力的態度、学校からの情報が役立ったかどうかの相関だけでなく、因果関係を明らかにすることで、信頼関係がより向上していくものと考えられる。

さらに、時期や学年によって情報提供の内容は異なるため、学校への期待感と協力的態度の長期的な変容を調査していくことで、より適した情報提供の内容とタイミングを考えることができるのではないかと推測される。

### <引用文献・URL >

- 1 文部科学省 2010 「生徒指導提要」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm) (2020.1.17)
- 2 上村恵津子 2015 「教師が行う保護者面談の特徴と課題—教師の発話特徴と専門性の視点から連携促進を考える—」『日本学校心理士会年報 第7号』  
[https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=18683&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=45](https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=18683&item_no=1&page_id=13&block_id=45) (2020.1.17)
- 3 米澤基宏・尾崎啓子 2012 「保護者と教師間の信頼関係構築に向けた成功プロセスモデル」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』  
[https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=16272&item\\_no=1&page\\_id=26&block\\_id=52](https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=16272&item_no=1&page_id=26&block_id=52) (2020.1.17)
- 4 今井一仁 2011 「教師と保護者の信頼関係構築に関する研究—小学校の実態調査をもとによりよい関係づくりを目指して—」『青森県総合学校教育センター 研究報告2010』  
[http://kenkyu.edu-c.pref.aomori.jp/?action=cabinet\\_action\\_main\\_download&block\\_id=1102&room\\_id=1&cabinet\\_id=3&file\\_id=385&upload\\_id=751](http://kenkyu.edu-c.pref.aomori.jp/?action=cabinet_action_main_download&block_id=1102&room_id=1&cabinet_id=3&file_id=385&upload_id=751) (2020.1.21)
- 5 露口健司他 2013 「学校組織のソーシャル・キャピタル」『平成24年度 科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書』  
<http://tsuyuguchi-r.com/report.html> (2020.1.17)

### <参考文献・URL >

- 1 東京都教職員研修センター 2002 「家庭教育支援に果たす学校の役割に関する研究」『東京都教職員研修センター紀要 第1号』  
<http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/bulletin/h13.html> (2020.1.20)
- 2 石川尚子 2019 『コーチングで学ぶ「言葉かけ」練習帳』ほんの森出版
- 3 本田恵子 2014 『先生のためのアンガーマネジメント 対応が難しい児童・生徒に巻き込まれないために』ほんの森出版
- 4 西村宣幸 2008 『コミュニケーションスキルが身につくレクチャー&ワークシート』学事出版
- 5 岩井俊憲 2014 『人生が大きく変わる アドラー心理学入門』かんき出版
- 6 篠真希・長縄史子 2015 『イラスト版子どものアンガーマネジメント—怒りをコントロールする43のスキル』合同出版
- 7 山田勇一 2017 「中学生の自己肯定感を育むコーチング・プログラムの開発」『青森県総合学校教育センター 研究報告2016』  
[http://kenkyu.edu-c.pref.aomori.jp/?action=cabinet\\_action\\_main\\_download&block\\_id=1102&room\\_id=1&cabinet\\_id=3&file\\_id=194&upload\\_id=519](http://kenkyu.edu-c.pref.aomori.jp/?action=cabinet_action_main_download&block_id=1102&room_id=1&cabinet_id=3&file_id=194&upload_id=519) (2020.1.17)
- 8 神谷和宏 2006 『図解 先生のためのコーチングハンドブック—学校が変わる・学級が変わる魔法の仕掛け—』明治図書出版



- 9 大野裕・中野有美 2015 『こころのスキルアップ教育の理論と実践』 大修館書店
- 10 足立啓美・鈴木水季・久世浩司 2014 『子どもの「逆境に負けない心」を育てる本 楽しいワークで身につく「レジリエンス」』 法研
- 11 小山英樹 2008 『子どもの心に届く言葉、届かない言葉』 学習研究社
- 12 神谷和宏 2015 『教師のほめ方叱り方コーチング』 学陽書房
- 13 嶋崎政男 2015 『子どものハートに届く ほめる・しかる55の原則』 教育開発研究所
- 14 赤坂真二 2013 『ほめる 叱る 教師の考え方と技術』 ほんの森出版
- 15 佐藤耕人 2015 「中学校における不適応生徒の早期発見・早期対応に関する研究―「アセス」の活用, チームでの支援, 勇気づけの言葉がけを通して―」『青森県総合学校教育センター 研究報告2014』  
[http://kenkyu.edu-c.pref.aomori.jp/?action=cabinet\\_action\\_main\\_download&block\\_id=1102&room\\_id=1&cabinet\\_id=3&file\\_id=14&upload\\_id=50](http://kenkyu.edu-c.pref.aomori.jp/?action=cabinet_action_main_download&block_id=1102&room_id=1&cabinet_id=3&file_id=14&upload_id=50) (2020. 1. 17)
- 16 石塚昭仁 2018 「学校・家庭・地域の三者連携のための目標設定の方策～三者の現状把握に基づく課題の明確化をとおして～」『2017年度秋田大学教職大学院 教育実践研究報告集第2号【現職院生編】』  
[https://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate\\_report.html](https://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_report.html) (2020. 1. 17)